日本産カササギ *Pica pica sericea* の由来 ——史料調査による

江口和洋*・久保浩洋**

The Origin of the Magpie *Pica pica sericea* in Japan —An Investigation of Historical Records

Kazuhiro Eguchi* and Hiromi Kubo**

Abstract The origin of the Magpie *Pica pica sericea* in Japan was discussed based on the historical records. There were few convincing records on the ecology of the Magpie, e.g. the distribution, habitat, breeding and feeding habits, etc., before the 16th century, whereas not a few records after the Edo era (the 17th century). Based on the records of the Magpie on the past distribution written on diaries, geographical descriptions and encyclopedias, traditions, and ordinances issued by feudal lords, it is likely that the Magpies were introduced from Korea to the southern coastal areas in Fukuoka and Saga prefectures by the feudal lords around the early 17th century.

はじめに

カササギ *Pica pica* は世界的には広範囲生息種であり、北半球に広く分布している (Birkhead 1991)。しかし、日本国内では佐賀県近辺にしか生息しないという、極めて特異的な地理的分布をしている。しかも、分布地域内ではきわめて高密度に生息している; 15~20 番い/平方キロ (江口未発表)。

カササギの過去の分布域を知る資料は非常に限られており、明治時代以降に限っても、地理的分布を正確に描くことは難しい。1923 年 (大正 12 年) に佐賀県内の 1 市 6 郡 (佐賀市、藤津郡、杵島郡、小城郡、佐賀郡、神埼郡、三養基郡) と福岡県内の 2 郡 (山門郡、三潴郡) は、カササギ生息地として天然記念物に指定された。少なくとも、この指定市郡内ではカササギの生息は知られていたが、この指定地域以外のカササギの生息状況については全くわからない。1927 年 (昭和 2 年) 刊の「八代郡誌」には「カササギ (明治 30 年頃までは棲息せしも今は全く見えず)」という記述があり、1923 年刊の「玉名郡誌」には、「肥前鳥 (カササギの別称)、玉名郡産」との記録があるが、「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」(佐賀県 1928) では、カササギの分布域は佐賀県内の上記 7 市郡と福岡県の一部としている。弥富 (1931) はカササギは天然記念物指定地内と長崎県北高来郡に生息し [1919 年 (大正 8 年) 刊の「北高来郡誌」では生息動物のリスト中にカササギはない]、佐賀県の東松浦、西松浦の両郡 (現在の唐津、伊万里両

Received 7 October 1991. Accepted 10 January 1992.

* Department of Biology, Faculty of Science, Kyushu University, Hakozaki, Fukuoka City, Fukuoka Prefecture, Japan

** Laboratory of Biology, Faculty of Education, Saga University, Saga City, Saga Prefecture, Japan

図 1. カササギの分布。カササギの繁殖が確認されている市町村を示す。塗りつぶし部分は高密度、濃い編目は中密度、淡い編目は低密度の地域、白丸は主要都市を示す。佐賀県については佐賀県・佐賀野鳥の会 (1989)、福岡県は池田 (1982, 1983) と江口による 1987 年の調査データ (未発表)、長崎県は手塚 (1972a, 1972b) に依った。

市を含む)には生息せずと報告している。これらの資料から推測すると、カササギの分布域は昭和初期には長崎、佐賀、福岡の三県の有明海沿岸部に限られていたようである。その後、谷口 (1951) は 1948 年 (昭和 23 年) に行った佐賀県内のカササギ分布のアンケート調査の結果を報告している。それによると、カササギは唐津、伊万里両市区域へ分布拡大していた。

最近では、佐賀、長崎、福岡三県の野鳥の会有志によって、1971, 72 年に合同の分布調査が行われた (久保 1971, 手塚 1972a, 1972b)。この調査は、生息地の全域をカバーしていないが、分布周辺地での調査を重点的に行っている。ついで佐賀県は 1975, 76, 77, 78, 84, 89 年県内全域のカササギの巣の分布調査を行った (佐賀県 1975, 1976, 1977, 1978, 佐賀県野鳥調査研究会 1984, 佐賀県・佐賀野鳥の会 1989)。また、池田 (1982, 1983) は福岡県内の分布について報告している。これら最近の調査によって最近のカササギの分布域を描いてみたのが図 1 である。後述するように福岡県北部でカササギの個体や巣が散見されているが図には含めていない。

このような狭い地理的分布の生じた理由については、豊臣秀吉の文禄・慶長の役 (1590 年代) の際にカササギが日本へ移入されたことに由来すると言われている (佐賀県 1828, 弥富 1931 など)。しかし、これらは明確な根拠に基づいて起源を述べたものではなく伝聞の段階を出ていない。根拠なしに、事物の起源を郷土の歴史上の人物に結び付ける事は有り得る事であ

る。久保(1983)は、日本におけるカササギの特異的な分布の生じた理由について、考えうる3つの仮説(残存説, 自然渡來說, 人工移植説)挙げて検討し、人為的な移植を示唆する史料を紹介している。本論文では久保(1983)の示した史料にさらに新たに史料を加えて日本のカササギの由来について検討した。

文献調査に当たっては、多くの歴史、郷土史研究家の方々のご援助をいただいた。北九州市立自然史博物館の武石全慈氏には、原稿を読んでご意見をいただいた。厚く御礼を申し上げる。

結果および考察

表1にカササギに関する記載のある江戸時代までの史料と明治以降の各市町村、郡の史誌を列挙した。大伴家持の有名な「鵲の渡せる橋におく霜の……」という歌に代表されるように、古来、カササギは和歌にうたわれることが多かった。しかし、そのほとんどが中国の言伝えに基づいたもので、実際の情景を描いたものではない。そこで、本論文では和歌集に記載された例は除き、歴史書、辞書、地誌、博物誌、日記、紀行文、藩の布告などを対象とした。なお、書名、引用文中の旧字体はすべて新字体に改めて表記した。

歴史や博物などの研究、記録は古い時代には一般的ではなく、大名、貴族、僧侶などの一部知識階級に限られていた。それが、江戸時代も1700年以降になると、故事、歴史、博物などの研究が、より下層の階級まで広まり、いわゆる本草学や地誌に関する書物が増えてきた。表に見るとおり、カササギについての記載も江戸時代以降に多い。

しかし、記録の量だけでなく、記述内容も江戸時代以前と以後では大きな違いがある。まず、古い時代には「かささぎ」の語の意味するものが必ずしも明確ではなかったようである。漢字の「鵲」は確かに今日のカササギを指すが、古代日本の「かささぎ」という言葉がすべて今日のカササギを指していたとは必ずしも言えない。まず、「かささぎ」の語の起源から調べると、日本の史料で初めて「鵲」の字が出現するのは「播磨国風土記(715年頃)」や「日本書紀(720年頃)」であるが、読みは示していない。また、「万葉集」にも、カササギの歌はない。すなわち、奈良時代以前に「鵲」を何と読んだかわからない。初めて「鵲」の字に「かささぎ」の読みを当てているのが確かめられるのは、平安中期の830年頃に成立した「倭名類聚集」である。また、この「かささぎ」の語は日本語起源ではなさそうである。新井白石の「東雅」、伴信友の「比古婆衣」では、「かささぎ」の語は朝鮮語由来であると解釈されている。白石は「かささぎ」の「かさ」は、朝鮮語でカササギを「カシ」と呼ぶことに、「さぎ」は日本語の「さわぎ(噪ぎ)」に由来するとした。信友は朝鮮の事を記録した「鷄林類事(宋の孫穆著)」が「鵲」に「渴則寄(カッソキ)」の読みを当て、「訓蒙字会(朝鮮の崔世珍著)」が「カサ」の読みを当てていることから、日本語の「かささぎ」は新羅の言葉が転訛したものと考えた。「日本書紀」には推古朝に難波吉士磐金が新羅から鵲二番いをもたらし、難波の杜に放したところ卵を産んだこと、同じく天武朝にも新羅から鵲が貢納されたという記事が見られる。この時に鵲の朝鮮名も伝えられ、これが和名の「かささぎ」になったものと思われる。とすれば、カササギが本来日本土着の生物ではなかったことの傍証ともなるし、名前の後半部の「サギ」は「鷺」とは全く関係ないことにもなる。しかし、奈良・平安時代には、鷺の仲間を指す「かささぎ」の語も使用されていたらしい。たとえば、「源氏物語」浮舟の巻にある「洲崎にたてるかささぎの」という文中の「かささぎ」の語は前後の文から推測して、鷺の仲間を指しているようである。「塵袋」には

表 1. カササギについての記載がみられる史料（和歌集を除く）。

文献名	著者	成立時代	カササギについての内容
江戸時代以前			
魏志倭人伝	陳寿	弥生時代	「……，鵲，……なし」
日本書紀	舎人親王	奈良時代	新羅よりの招来，朝貢記事
播磨風土記	——	奈良時代	播磨国讃容郡船引山の記事
本草和名*	深根輔仁	平安中期	中国文書の紹介（「かささぎ」）
倭名類聚抄*	源順	平安中期	“
類聚名義抄*	菅原是善	平安末期	読み方（「かささぎ」）
源氏物語	紫式部	平安時代	「洲崎にたてるかささぎの姿……」
塵袋*	不詳	鎌倉時代	鵲，笠鷺の 2 種
花宮三代記*	不詳	室町以後	「応安元年御所に白鵲あり」
江戸時代以後			
元茂公御年譜	——	1641/42	小城藩のカササギ狩猟禁止令
丹邱邑誌	——	1672	多久領内でのカササギ狩猟禁止
神代鍋島文書	——	1647/53	三根郡，神埼郡での狩猟禁止
久留米石原家記**	石原為年	——	鵲渡来の記述（寛永 18 年（1641 年））
和爾雅*	貝原益軒	1694	「鵲」の読み方
本朝食鑑*	人見必大	1695	公家で飼育する者あり（中国より）
東雅*	新井白石	1719	日本書紀引用，「カササギ」は朝鮮語から
筑前国統風土記	貝原益軒	1703	「寛永年中肥前より来る」
大和本草*	貝原益軒	1709	「筑紫に多し」
和漢三才図会	寺島良安	1712	「近頃，中華より来る」
筑前国産物帳	小野玄林他	1738	「たうがらす（高麗がらす）」
南筑明覧	戸次求馬	1765	立花宗茂が朝鮮よりもたらす
物類称呼*	越谷吾山	1775	「西国に有，唐がらす，高麗がらす」
西遊雑記	古川古松軒	1783	肥前大町での観察記録
江漢西遊日記	司馬江漢	江戸中期	神埼でカササギ目撃（1788 年）
本草綱目啓蒙*	小野蘭山	1803	「筑前後，肥前後には多し」
甲子夜話	松浦静山	1821	「佐嘉より神埼まで……」
温山文	川北儀卿	江戸後期	三地駅で筑後鳥を目撃（1823 年）
西海雑志	松浦武四郎	1843	「柳川から佐嘉領内……」
原氏系図	——	1847	朝鮮より持ち帰り
江戸参府紀行	シーボルト	1867	嬉野・神埼間でカササギ目撃（1826）
比古婆衣*	伴信友	江戸後期	鵲とアオサギの 2 種，和名の由来
明治時代以後			
福岡県旧租要路**	——	明治初期	山門郡内に高麗鳥生息
玉名郡誌	——	1923	肥前鳥，玉名郡内に産す
三潞郡誌	——	1925	宗茂，1 番を山門郡清水寺に放つ
八代郡誌	——	1927	「明治 30 年頃までは生息せし」
柳川年表**	渡邊村男	——	文禄 3 年，宗茂，鵲を城下に放つ
久留米市史	——	1955	筑後のカササギ

*:「古事類苑」所収。**:「福岡県史資料」（伊東尾四郎編）所収。

「かささぎ」の語は「鵲」と「みの（養）毛の頭にある鷺（ゴイサギか）」の両方を指すという記述が見える。同様に「比古婆衣」は源氏物語の「かささぎ」を「蒼鷺（アオサギ）」と解釈している。江戸時代以前のカササギの記録にはこのような語の用法の混乱が見られる。

次に，「日本書紀」から江戸時代以前の文書に見えるカササギは朝鮮からの貢納記事であるか，中国文献の紹介か，「鵲」という語の説明であるか，そうでなければ文学作品に登場するも

のがほとんどである。記録文書としては「播磨国風土記」と室町時代の「花宮三代記」にカササギの記述がある。前者は、讃容郡船引山（兵庫県佐用郡）についての記述であり、この中に「鵲住めり。世俗に韓国の鳥と云えり」とある。字義どおりにうけとれば、カササギの生息を伝えるものであるが、その習性を記述した中に、「枯木の穴に栖み……」というように、カササギの習性とは少し違っている点がある。「花宮三代記」には「応安元年（1369年）、御所に白鵲あり」という記述がある。これは瑞鳥出現の記録であるが、他に詳しい記述はないので、確かにカササギの目撃記録なのか、どうかはわからない。

カササギは人里に棲み、木の枝を用いて、樹上に大きなボール状の巣を作るが、この巣は非常によく目だつ。もし、カササギが生息していれば、スズメやカラスなどと同様に人間との接触は日常であり、文字記録以外にも口碑や風俗などに痕跡をとどめたと考えられる。しかし、総じてカササギの具体的な生息の記述、記録は無いといってよい。ついでながら、「播磨国風土記」と同時代に成立した「肥前国風土記」は佐賀平野の各地の紹介をしているが、カササギに関した記述はない。これらのことから、古代、中世の日本には「魏志倭人伝」に「鵲無し」というように、カササギは生息していなかったと思われる。

カササギの過去の分布を知る資料はほとんどなく断片的であるが、江戸時代以降になるとカササギの生息地や習性など具体的な記録が多くなる。1703年刊の「筑前国統風土記（貝原益軒著）」には、カササギについて、「昔は此所になし、寛永年中肥前より来る。その後漸多し」とある。1738年（元文3年）に黒田藩が幕府に提出した「筑前国産物帳」には、藩内の産物として、「とうがらす（高麗がらす）」の図がある。筑前国は現在の福岡市付近から、筑紫山地を越えた甘木、朝倉地方までを含んでいる。必ずしもカササギが福岡市近辺にまで分布していたというわけではなく、甘木、朝倉地方に分布していたのかもしれない。

筑後地方では「南筑明覧（1765年）」に、「南筑（南筑後地方）の外他領には栖まず」とある。また、「温山文（川北儀卿著）」には文政6年（1823年）に、三池駅（現在の大牟田市内）で筑後鳥（カササギ）を目撃したことが記されている。久留米以北には少なく、南部の三潞郡、柳川、大牟田方面には多かったものと思われる。1955年（昭和30年）刊行の「久留米市史」に「（カササギは）三潞、三池郡部に多かったが、近年三井郡、朝倉郡、久留米市方面にも広がった」といわれるように、筑後川中流域の筑前南部、筑後北部地域に分布するようになったのは極めて最近の事である。

佐嘉藩関係では、「西遊雑記」「甲子夜話」「西海雑志」「江漢西遊日記」「江戸参府紀行」などの日記、紀行文に「肥前大町」「佐嘉より神埼の間」「柳川より佐嘉領内」「神埼」などで、それぞれカササギを目撃したことが記録されている。長崎県内の分布を記録した文書は見つからないが、上述の文献を見る限りは、少なくとも長崎街道沿いでは現在の佐賀県内に分布が限られていたようである。これらの文書によると、少なくとも18世紀ごろにはカササギは旧筑前、筑後、肥前の領内、特に柳川、佐賀領内の有明海沿岸に多く生息していたことがわかる。

一方、これらの地域以外ではどうであろうか。先に述べた「八代郡誌」によると、八代郡内ではかつてカササギが生息してらしい。しかし、この地域での生息を伝えるものはこの文書の短い記述だけである。「物類称呼」に「西国に多し、五畿内東国になし」、「本朝食鑑」や「和漢三才図会」に「未だ常には有らず」というように、西九州以外での生息は知られていなかったことがわかる。

これらの事から、カササギは古くは生息せず、江戸時代以降現在の分布中心地の筑紫平野（とくに佐賀平野）にはまれでなく生息していたと考えられる。少なくとも、古代には日本のあちこちにいたものが、現在のように分布を狭めるに至ったのではない。では、カササギが筑紫平野に生息するようになった起源はなんであろうか。久保（1983）は遺存の可能性を否定した後、自然渡来と人為的移植の2つの可能性を検討している。

現在カササギが高密度に分布するのは、福岡県では三潞郡、大川市、山門郡、柳川市であり、佐賀県内ではこれらの地域と筑後川をはさんだ佐賀郡、佐賀市の近辺である。それぞれ、旧柳川藩と佐嘉藩の領域である（図1）。また、江戸時代の初期にすでに、「朝鮮がらす」「高麗がらす」「とうがらす」などのカササギの別称が用いられていた。前二者は現在でも朝鮮半島からの渡来の言伝えとともに福岡、佐賀県内で用いられている。江戸以前では記述そのものが少ないが、別称の記述も見あたらない。前にみたように、現在カササギの大部分は、佐賀平野を中心に分布している。これらの事から、カササギは朝鮮半島から旧柳川、佐嘉の両藩の領域に渡来したらしいことがうかがわれる。

久保（1983）は必ずしも自然渡来を否定してはいないし、他の文献にもそのような考えは散見する（関谷 1956 など）。しかし、現在のカササギが大陸からの自然渡来によって分布した可能性は非常に低い。最近、佐賀平野を中心とした分布地以外でのカササギの目撃が多い。以前より、玄海灘沿岸の福岡市今津、長崎県壱岐、対馬では、冬期にカササギの迷行が知られていたが、最近では福岡県の玄海灘沿岸から筑豊にかけて、安定した個体群は形成してはいないものの、毎年数カ所での造巢の報告がある（祝原 1990）。このような報告の増加は、野鳥に目を向ける人の増加と情報伝達手段の発展によっており、必ずしも造巢自体の増加ではなく、以前にもこのような散発的な造巢は繰り返されていたものと思われる。これら玄海灘沿岸のカササギと佐賀平野の個体群では分布に連続性がない。報告例の一つ一つについてその個体の由来をたどるのは不可能であるが、おそらく多くは大陸からの迷行個体が住みついたものと推測される。日本のカササギ個体群がこのような大陸からの迷行個体に始まった可能性も皆無ではない。しかし、福岡県の玄海灘沿岸部はカササギの生息環境としては佐賀平野と大差ない。地理的障壁となっている筑紫山地を越えた佐賀平野にあるカササギ個体群が、北方の朝鮮半島からの自然渡来によって形成されたのであれば、福岡平野にも古くからカササギの個体群が形成されているはずである。しかし、福岡平野にカササギが多数生息していた事実はない。佐賀平野のカササギ個体群が大陸からの自然渡来に起源する可能性は非常に低い。

そこで、人為的な移植が最も有力な説明になる。現在、カササギの分布地では、カササギは豊臣秀吉の「朝鮮の役」の時に朝鮮よりもたらされたという言伝えが広くいきわたっている。もたらした人物は、佐賀県であれば鍋島直茂であり、筑後では立花宗茂であり、熊本県では加藤清正と、さまざまである。郷土の歴史上の人物と事物の起源を結び付けるのはありがちなことであるから、これらの言伝えの信憑性はどうか。1709 年に出た貝原益軒の「大和本草」には「朝鮮より来たりしや、高麗鳥といふ」との記述があり、この当時カササギは朝鮮から渡来したとの認識があったことがわかる。また、同じ著者の「筑前国続風土記」には「寛永年中に肥前より来る」との記述があり、筑前のカササギは肥前から渡来したとの認識があった事がわかる。「久留米石原家記」の寛永 18 年（1641 年）の記述に「鵲、近年高麗国より渡る。これにより高麗鳥とも云う」とある。柳川藩関係では「南筑明覧（1765 年）」に、「立斎公（立花宗

茂のこと）朝鮮においてこれを獲えて、帰陣の後領内に放つ」とある。また、1925 年（大正 14 年）刊の「三瀨郡誌」には、「宗茂一番いを持ち帰り、山門郡本吉村清水寺の山（現在の山門郡瀬高町）に放し、捕獲を禁ず」と具体的な放鳥の場所まで記載しているが、根拠とした資料は明かではない。佐嘉藩関係では久保（1983）は「原系図」（1847）にあるカササギ招来の記事を紹介している。「原系図」とは肥前鹿島藩士原一族の系図（佐賀県立図書館所蔵）である。これによると、文禄年間に鍋島直茂の家臣、原十左衛門吉親という人物が直茂の命により、「朝鮮より鳥を執り来たり、これを本国に放つ、これを唱えて勝鳥と命す」とある。「原系図」が 250 年前の事件をどのような資料に基づいて記録したのか不明だが、これが確かだとすれば、言伝えの通りカササギは秀吉の時代に朝鮮から移植されて広がったことになる。これを裏付けるものとして、1600 年代に佐嘉藩内の三根郡や神埼郡、支藩の小城藩や多久領内で出されたカササギの狩猟禁止令がある（「元茂公御年譜」、「神代鍋島文書」、「丹邱邑誌」など：久保（1983）による）。他藩ではまだ保護の記録は見つかっていないが、少なくとも佐嘉藩ではカササギを瑞鳥として保護したことがわかる。鳥など比較的少産の動物は数個体を放飼するだけでは定着増殖するには不十分で、積極的な繁殖、保護がなされて初めて可能である。佐嘉藩では藩祖がもたらしたカササギを増殖のため保護を加え、その結果 18 世紀初頭には、「大和本草」が「筑紫に多し」と記述するほど数が増えたものと思われる。

カササギの移植の直接的な証拠はない。しかし、現在の分布状況や史料などの状況証拠に従えば、カササギは 16 世紀末から 17 世紀初頭くらいに朝鮮半島から人為的にもたらされた可能性が最も高い。移植直後は佐嘉藩の記録にあるように、領主の保護を受け、かなり急激に増殖したようである。その後、個体数の増加はそれほどでもなく、分布範囲は 1948 年の谷口（1951）の調査時までは、1700 年代の江戸中期とそれほど違いはなかったようである。その後、1960 年代から現在までは再び分布の拡大の時期に入っているようで、筑紫平野東部、長崎県内、東松浦地方への進出や密度の増加が目だつ（図 1）。生息に適した、競争種の少ない新天地へ侵入した動物は急速に個体数を増加させるが、江戸時代のカササギはこのような状況であったであろう。しかし、分布の拡大は地理的障壁に出会うことで一時停滞したようである。久保（1971）はカササギが標高 50m 以上の地域にほとんど生息しないことから、山地に分布する連続した森林が障壁となったと指摘している。1960 年代以降は大規模な土地開発が始まり、特に丘陵部や山麓部の森林が、果樹園、宅地に変えられた。このような、丘陵部の開発とそれによる森林の後退がカササギの障壁を取り除く働きをし、その結果カササギの分布が再び拡大し始めているものと思われる。

摘 要

1. 史料に基づき、日本におけるカササギの生息の起源について検討した。
2. 16 世紀以前の史料にはカササギに関する具体的な記述はほとんどなく、17 世紀以降の史料にはカササギの生息地、生息地域における呼称、習性などの記述が見られる。
3. 17 世紀以降の江戸時代には、カササギは福岡、佐賀両県の有明海沿岸（旧柳川、佐嘉藩領内）で多く目撃されている。
4. 17 世紀前半には、カササギが朝鮮半島より人為的に渡来したとの認識が広まっていた。
5. 佐嘉藩ではカササギをもたらした人物の名が記録されている。

6. 佐嘉藩ではカササギは捕獲禁止の対象となり、17世紀に禁止令が何度か発令された。
7. 史料検討の結果、カササギは17世紀以降に朝鮮半島より旧柳川、佐嘉藩領内へ移植され、藩主の保護策により個体数を増加させたと、推測される。

引用文献（表1に挙げたものは除く）

- Birkhead, T. R. 1991. *The Magpies*. T. & A. D. Poyser, London.
- 池田浩一 1982. 野生鳥獣に関する基礎的調査研究. 福岡県林試昭和 57 年度業務成績報告書: 51-54.
- 池田浩一 1983. 野生鳥獣に関する基礎的調査研究. (1) 鳥獣生息状況調査. 福岡県林試昭和 58 年度業務成績報告書: 45-46.
- 祝原道衛 1990. カササギの福岡県における新分布. わたしたちの自然史 **33**: 11-13.
- 久保浩洋 1971. 日本におけるカササギの地理的分布について (予報). 佐賀大学教養部研究紀要 **3**: 75-81.
- 久保浩洋 1983. 九州に生息するカササギの由来. 西日本分化 **188**: 25-27.
- 佐賀県 1928. 鵲生息地. 佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第 1 輯: 35-36.
- 佐賀県 1975. カササギの生態調査報告書.
- 佐賀県 1976. カササギの生態調査報告書 (第 2 報).
- 佐賀県 1977. カササギの生態調査報告書 (第 3 報).
- 佐賀県 1978. カササギの生態調査報告書 (第 4 報).
- 佐賀県・佐賀野鳥の会 1989. カササギの生態調査報告書 (平成元年度).
- 佐賀野鳥調査研究会 1984. カササギの生態調査報告書.
- 関谷国英 1956. 天然記念物鵲棲息地. 佐賀県天然記念物文化財調査報告 第 10 輯: 63-65.
- 谷口一夫 1951. 佐賀県内カササギの分布と生態. 郷土研究 **3**: 24-32.
- 手塚静雄 1972a. 1971 年のカササギ分布調査報告. 佐賀県立博物館報 **8**: 4-5.
- 手塚静雄 1972b. 1972 年のカササギ分布調査報告. 佐賀県立博物館報 **11**: 4.
- 弥富喜三 1931. 鵲に就きて. 応用動物学雑誌 **3**: 92-99.